

大学生における子どもの価値、個人化志向とライフスタイル

豊田 史代* 岡本 祐子*

The value of children, the tendency toward individualization,
and life style in university students.

Fumiyo Toyota* Yuko Okamoto*

The purpose of this study was to investigate (1) the constitution of the value of children in university students, (2) the relation between the value of children and sex, (3) the relation between the value of children and the tendency toward individualization, (4) the relation between the value of children and life style. 261 university students participated in this study. The results of this study were as follows. (1)The value of children in university students consists of four factors: emotional value, traditional value, restriction and burden, and value of social relationship. (2)Females valued “restriction and burden” higher than males. (3)There was correlation between the value of children and the tendency toward individualization. (4)Life style which students wanted to be in their future was related to the value of children.

Key words: value of children, tendency toward individualization, life style

問題および目的

今日、急激な社会変化に伴い、従来の男女の生き方と家族役割が変化してきている。科学・医学の進歩による長寿命化と少産少子化は、育児期間の短縮をもたらし、女性の母親役割を縮小し、男性の職業生活後の期間を延長した（柏木，1998；目黒，1987）。工業化・商業化の進展による家事省力化は、女性の主婦役割の縮小と男性の家庭役割参加の拡大を促し、産業構造の変化は、女性の労働市場参入と男性の家計維持機能の比重縮小を促した（柏木，1998）。このような変化に伴い、個人が選択することができるライフスタイルは多様化してきた。結婚をして家庭を持つということは、人として当たり前の経験ではなく、選択肢の一つとなった。そして、子どもを産み育てるということも、自然・当然のことではなく、親の意思によって選択されるものとなったのである。こうした状況のなかで、親にとっての子どもの価値も変化してきている。

柏木・永久（1999）は、近年の人口動態的变化による子どもの価値の変化を検討するため、40歳

*広島大学大学院教育学研究科（Graduate School of education, Hiroshima University）

代と 60 歳代の既婚有子である女性を対象として子どもの価値の研究をおこなった。その結果、年長世代の母親は、子どもは絶対的な価値を持つ存在とみており、「子どもを持って一人前であり、家の継承のため必要」といった社会的な価値を強く認めているのに対して、若い世代の母親は、自分自身の成長や経験のための価値が大きな比重を占めるということが明らかになった。また、父親と母親とでは、それぞれが捉える子どもの価値に違いがみられることも明らかになっている。大野・柏木・若松・岡松（1996）は、父親と母親が感じている子どもの価値の違いについて検討した。その結果、父親・母親ともに子どもを「自分の人生に楽しさや充実感を与えてくれる」と強く感じているが、母親は「子育ては楽しいが負担にもなる」と両義的な価値を持っているのに対して、父親は「子どもは社会的な価値を持ち、自然・当然の存在である」といった観念的・抽象的な価値を強く感じていることが明らかになった。

また、急激な社会変化により、家族と個人の関係も大きく変化してきている。「家族のなかの個人」から「個人にとっての家族」へと変わり、家族のなかで自分個人としての私的領域を求める傾向が強くなってきている（目黒，1987）。特に女性においてその変化は著しい。少子高齢化に伴い、母親にとって、子育て期間は長い一生のうちのほんの一時に過ぎなくなった。柏木（2001）は、「女性の一生＝母親の一生、女性の幸福＝母親の幸福という図式は、通用しなくなってしまった」としている。その結果、女性は、母親として妻としてではなく、個人としての自分の生き甲斐を求めるようになったのである。

この、家族のなかで個人としての私的領域を求める傾向について、平山（1999）は、「家族との関係を基盤にした生き方以外に、自分自身の個人としての生活・生き方を求める欲求」を「個人化欲求」と定義して、育児期の専業主婦を対象に、個人化欲求の内容と程度などを検討した。その結果、専業主婦における個人化欲求は全体的に高く、学歴が高いほど個人化欲求が高いことや、市場労働を通して経済的報酬を得ることを志向する傾向は、個人化欲求と関連があることなどが明らかになった。また、永久・柏木（2001）は、中年期の母親は、自分自身を、家族と一体の存在と捉えるのと同程度に、独立した個人として捉えているにも関わらず、実際には個としての自分よりも家族のために多くの資源（時間や心的エネルギーなど）を配分していることを明らかにしている。

女性が家族のなかで個人としての私的領域を求める傾向は、子どもを持つことへの考え方、つまり女性にとっての子どもの価値と結びついている。先の柏木・永久（1999）の母親を対象とした研究では、母親にとっての子どもの価値と家族のなかで個人としての私的領域を求める傾向（家族のなかでの個人化志向）との関連についても検討されている。その結果、家族のなかでの個人化志向は、世代を超えて全体的に強く見られたが、若い世代ほど個人化志向が強いことが明らかになった。また、個人化志向が弱い母親は、子どもの精神的価値を高く認め、とりわけ社会的な価値を強く認めるのに対して、個人化志向が強い母親は、子どもの価値への評価が全体的により低く、個人化志向は子どもを産むことを消極的にさせる方向と結びついているということが示唆された。

では、まだ子どもを持たないより若い世代である大学生は、将来築いていく家庭と自分との関係をどのように考え、子どもの価値をどのように評価しているのだろうか。子育てを経験していない大学生においても、将来築いていく家庭のなかで、個人としての自分をどれほど大切にしたいかと

いうことは、子どもの価値と関わっているのではないかと考えられる。また、今日、子どもの価値は絶対的なものではなく、親にとって価値ある他の諸事物と比較検討されるものとなっている(柏木・永久,1999)。それならば、仕事と育児とのバランスを考えて、どのようなライフスタイルを望むのかということは、子どもの価値と関連しているのではないだろうか。

前原(2002)は、大学生が認知する子どもの価値と、将来に望むライフスタイルや現在の家族に対する評価などとの関連を検討した。その結果、大学生が認知する子どもの価値は、〈情緒的価値〉、〈必然的価値〉、〈道具的価値〉といった肯定的価値と、否定的なく子育て代償〉から構成されていること、現在の家族に対する評価が高いほど、子どもは家族を明るく楽しいものにしてくれるという〈情緒的価値〉を高く評価することなどが明らかになったが、子どもの価値と望むライフスタイルとの関連は認められなかった。しかし、前原(2002)の研究では、将来のライフスタイルの選択肢のすべてが、結婚をして子どもを持つことを前提としたものだった。また、高学歴である女性は、将来に理想とするライフスタイルと、実際になりそうな予定のライフスタイルとの一致率が低いことがわかっている(国立社会保障・人口問題研究所,1999)。これらのことより、子どもの価値と将来のライフスタイルとの関連を検討するには、「結婚および出産をしない」という選択肢を加え、さらに、将来のライフスタイルを理想と予定とに分けて設定する必要があると考えられる。

以上のことから、本研究では、現代の大学生男女が評価する子どもの価値について検討することを目的とする。特に、大学生における子どもの価値と性別との関連、家族のなかでの個人化志向との関連、さらに、将来のライフスタイルとの関連を中心に検討する。

予備調査

目的 柏木・永久(1999)は、子どもの価値における若い世代の特徴として、「子どもを育ててみたい」「妊娠・出産を経験してみたい」といった、自分の経験の上での価値が高いことを挙げている。しかし、前原(2002)の大学生における子どもの価値を問う質問項目に、この「自分の経験のための価値」を表す項目は無かった。したがって、この「自分の経験のための価値」を含めて、現代の大学生が評価する子どもの価値の特徴のような項目を、前原(2002)の質問項目に加える必要があると考え、新たな質問項目の選定を目的として、予備調査を行った。

方法 ①調査対象者：A大学の教育学部学生、47名(平均年齢20.09歳、レンジ19-31歳)。男女の内訳は、男性10名(平均年齢20.10歳、レンジ19-21歳)、女性37名(平均年齢20.08歳、レンジ19-31歳)であった。

②調査時期および手続き：調査時期は2004年6月であった。大学の一般教室内で、講義時間を用いて、集団法による質問紙調査をおこなった。

③調査内容：柏木・永久(1999)が、子どもの価値の調査において、子どもを産んだ際の考慮理由をその人が持つ「子どもの価値」としていたことから、本研究の予備調査では、柏木・永久(1999)の研究に準じて以下の手続きを採用した。①将来子どもが欲しいと思うか回答を求め、②その理由について自由記述による回答を求めた。最後に、フェイス項目として、学年/性別/年齢を設定した。

結果および考察 設問①「将来子どもが欲しいと思うか」についての回答の度数分布を全体と男女別に表1に示した。

表1 「将来子どもが欲しいと思うか」への回答 数字は人数（割合）

	欲しい	欲しくない	わからない	計
男性	8 (80%)	0 (0%)	2 (20%)	10 (100%)
女性	26 (70%)	1 (3%)	10 (27%)	37 (100%)
計	34 (72%)	1 (2%)	12 (26%)	47 (100%)

設問②「子どもが欲しいかどうかに対する理由」についての自由記述回答を検討したところ、前原(2002)の質問項目全29項目のうち21項目にあてはまる回答が見られた。それだけでなく、前原(2002)の項目に含まれない内容の回答もみられたため、これらのうち同じ内容の回答が複数存在するものを選び、その内容を反映した項目表現を検討し、以下の5つの質問項目として加えることとした。

- ・子育てを経験してみたいと思う
- ・妊娠・出産を経験してみたいと思う(女性のみ)
- ・次世代を生み育てるのは、人としてのつとめだと思う
- ・妊娠・出産に耐えられるか不安である(女性のみ)
- ・自分が親になることに自信がない

本調査

目的 本研究では、以下の点を中心にして、大学生における子どもの価値について検討することを目的とする。

- ① 大学生における子どもの価値の内容と構造
- ② 大学生における子どもの価値と性別との関連
- ③ 大学生における子どもの価値と家族のなかでの個人化志向との関連
- ④ 大学生における子どもの価値と将来のライフスタイルとの関連

方法 ①調査対象者および分析対象者：A大学の教育学部の学生283名を対象に調査を行い、このうち有効回答を得た261名（平均年齢20.83歳，レンジ20-26歳）（有効回答率92.2% 内訳 2年生2名，3年生249名，4年生8名，大学院生2名）を分析対象とした。男女の内訳は、男性112名（平均年齢20.96歳，レンジ20-26歳），女性149名（平均年齢20.69歳，レンジ20-22歳）

であった。

②調査時期および手続き：調査時期は2004年10月から11月であった。大学の一般教室内で、講義時間を用いて、集団法による質問紙調査をおこなった。

③調査内容：「子育てに対する考え方の調査」と題して、以下の項目からなる質問紙を作成した。

(1)ライフスタイルについて：女性には、将来に望む「理想のライフスタイル」と、実際になりそうな「予定のライフスタイル」の二つについて回答を求めた。男性には、将来共に家庭を築く女性に対して望む「期待のライフスタイル」について回答を求めた。各質問への回答は、国立社会保障・人口問題研究所(1999)の調査を参考に、①結婚せずに仕事を一生続ける(非婚就業)/②結婚するが子どもは持たず仕事を一生続ける(DINKS)/③結婚し子どもを持つが、仕事も一生続ける(両立)/④結婚し子どもを持つが、結婚出産の時期にいったん退職し、子育て後に再就職する(再就職)/⑤結婚あるいは出産の機会に退職し、その後は仕事を持たない(専業主婦)の計5つの選択肢を設定した。

(2)子どもの価値：現代の大学生が、どのような価値を持つ存在として子どもを捉えているのかを問う質問項目。前原(2002)の子どもの価値についての質問項目29項目に、予備調査の結果から選定した5項目を加えて、計34項目を使用した。そのうち32項目は男女共通の項目であり、「妊娠・出産を経験してみたいと思う」と「妊娠・出産に耐えられるのか不安である」の2項目は女性にのみ回答を求めた。回答は、「よく当てはまる」、「全く当てはまらない」を両極とする4段階での評定を求める形式をとった。

(3)家族のなかでの個人化志向：本研究では、「家族のなかでの個人化志向」を、家族のなかであっても、個人としての自分に、どれだけ価値をおいて大切にしたいと思うのかという観点から捉えることとした。そこで、将来の家庭において、自分を「家庭人としての自分」「個人としての自分」の2つに分けて考えた場合、この2つの自分に、それぞれどれほどの割合で①価値を置きたいか(価値配分)②時間と労力を割り当てられるか(資源配分)質問した。①②ともに、それぞれ全体を10として、例えば「6：4」というように、整数で分けて回答するよう求めた。

(4)フェイス項目：学部／学年／性別／年齢

結果 1. 大学生における子どもの価値の内容と構造

本研究における子どもの価値の構造を検討し、比較の軸としての因子を探るために、因子分析を行った。今回は、性別による子どもの価値の違いについても検討するため、男女共通の因子構造を探る必要があると考え、女性のみを2項目を含めた分析については他の機会に検討することとし、本研究では女性のみを2項目を除いた、男女共通の32項目を用いて行った。因子の抽出には主因子法を用いた。因子数は、固有値1以上の基準を設け、プロマックス回転を行った。ただし、各項目のうち、因子負荷が0.3に満たなかった3項目を削除し、再度、因子分析を行った。その結果、5因子が抽出されたが、そのうちの1因子については、項目数が2項目と少なかったことから削除し、再度、因子分析を行った。その結果、解釈可能な4因子が抽出された(表2)。

表2 「大学生における子どもの価値」項目の因子分析結果

	因子1	因子2	因子3	因子4	共通性
	精神的 価値	伝統的 価値	制約・ 負担	社会的 関係価値	
子どもがいると、家庭が明るく楽しいものになるだろう	0.80	-0.01	0.04	-0.06	0.57
子どもを育てることは、親にとって大きな喜びだと思ふ	0.70	0.01	-0.13	0.02	0.58
年をとったとき、子どもがいると心強いだらう	0.65	0.03	0.29	0.03	0.42
子どもは親の心の支えになると思ふ	0.63	-0.13	0.01	0.17	0.41
子どもがいれば何かと心強いと思ふ	0.62	0.06	0.02	-0.04	0.42
子どもを育てることで、親も大きく成長すると思ふ	0.58	-0.11	0.02	0.06	0.30
子育ては親の生きがいになると思ふ	0.55	0.12	-0.13	0.03	0.45
※子育てを経験してみたいと思ふ	0.54	-0.01	-0.26	0.07	0.47
子どもを持って一人前だと思ふ	-0.14	0.79	-0.06	0.05	0.55
結婚したら子どもを持つのは当然だらう	0.09	0.71	-0.04	-0.16	0.49
子どものいない人生はむなしと思ふ	0.21	0.69	-0.02	-0.07	0.63
親になってはじめて社会的に認められると思ふ	-0.14	0.68	0.05	0.15	0.49
子どものいない夫婦はかわいそうだ	-0.13	0.63	-0.08	0.12	0.40
子どものいない生活はつまらないだらう	0.37	0.52	0.02	-0.18	0.50
子どもがいないと夫婦の存続が危うくなると思ふ	-0.05	0.48	0.21	-0.01	0.25
※次世代を生み育てるのは、人としてのつとめだと思ふ	0.16	0.46	0.05	0.18	0.44
子どもを持つと精神的に休まらないだらう	0.03	0.02	0.70	-0.09	0.45
親になると自分のやりたいことができないと思ふ	-0.04	0.03	0.68	0.02	0.48
子どもを持つことで親としての悩みに振り回されると思ふ	0.16	0.08	0.64	-0.06	0.37
子どもを持つと自分の人生が犠牲になると思ふ	-0.22	0.01	0.55	0.08	0.44
子どもがいると、お金がかかりすぎると思ふ	0.27	-0.24	0.47	0.05	0.22
※自分が親になることに自信がない	-0.12	-0.03	0.45	0.02	0.25
親は早く子どもから解放されたいと思ふものだ	-0.26	0.16	0.34	0.09	0.24
子どもを持つことで、親戚関係が親密になると思ふ	-0.06	0.05	-0.05	0.76	0.59
子どもがいると社会参加の機会が得られると思ふ	0.18	0.01	-0.05	0.49	0.34
子どもの問題は、親の社会的評価に関わってくると思ふ	0.16	0.01	0.20	0.40	0.29
子どもを育てることで、大きな有能感が得られると思ふ	0.18	0.24	-0.01	0.34	0.35
因子寄与	5.44	4.94	2.90	2.85	
因子間相関	因子1	因子2	因子3	因子4	
因子1		0.52	-0.30	0.36	
因子2			0.01	0.43	
因子3				0.22	

削除した項目：「子どもは夫婦の愛の結晶である」「子どもは家の存続やお墓を守る大切な存在だと思ふ」「子どもは親の話し相手になると思ふ」「子どもは親の夢や理想を託せる存在だと思ふ」「子どもは親の分身だと思ふ」
 ※は、本研究において予備調査をもとに前川（2002）の質問項目に加えた項目

第一因子は、子どもは親の精神的な支えであり、家庭を明るくしてくれるということを示していることから、＜精神的価値＞と命名した。第二因子は、子どもを持つことを自然・当然のこととして、子どもに対して絶対的な価値を与えており、日本において伝統的に受け入れられてきた価値と考えられることから、＜伝統的価値＞と命名した。第三因子は、子どもは自分の生活の自由を狭め、負担となるものだということを示していることから、＜制約・負担＞と命名した。第四因子は、子どもを持つことは、社会との関係に結びつくことであるとしていることから、＜社会的関係価値＞

と命名した。各因子について、因子負荷量が 0.40 以上の項目を選択し、粗点（1 から 4 点）の合計を項目数で割った得点を各因子の得点とした。各因子の信頼性係数（Cronbach の α 係数）はそれぞれ、＜精神的価値＞が $\alpha = .84$ 、＜伝統的価値＞が $\alpha = .85$ 、＜制約・負担＞が $\alpha = .75$ 、＜社会的関係価値＞が $\alpha = .64$ であり、また全体の信頼性係数（Cronbach の α 係数）は $\alpha = .85$ であった。全体としては、十分な信頼性が確認された。＜社会的関係価値＞に関しては、 $\alpha = .64$ とやや低い値であったが、項目数が 3 と少ないことから、本研究ではこの 3 項目を採用した。

2. 大学生における子どもの価値と性別との関連

子どもの価値と性別との関連を検討するため、男女別に各因子得点の平均値を求め、性別と子どもの価値の 2 要因分散分析をおこなった。男女別に見た子どもの価値各因子得点の平均値と標準偏差を表 3 に示した。

分散分析の結果、子どもの価値要因の主効果が認められ ($F(3, 777) = 317.75, p < .001$)、性別と子どもの価値の交互作用も有意であった ($F(3, 777) = 4.76, p < .005$)。そこで、単純主効果の検定を行った結果、＜制約・負担＞において、性別の単純主効果が有意 ($F(1, 1036) = 8.65, p < .005$) であった。また、男性においても女性においても、ともに子どもの価値要因の単純主効果が有意（男性 $F(3, 777) = 152.79, p < .001$ ；女性 $F(3, 777) = 169.72, p < .001$ ）であった。男性、女性それぞれにおける子どもの価値要因による因子得点の差について、Ryan 法による多重比較を行った結果、男性では、＜精神的価値＞が他の 3 因子に比べて有意に高く、＜社会的関係価値＞が＜伝統的価値＞と＜制約・負担＞に比べて有意に高かった。女性では、＜精神的価値＞が他の 3 因子に比べて有意に高く、＜社会的関係価値＞が＜伝統的価値＞と＜制約・負担＞に比べて有意に高く、＜制約・負担＞は＜伝統的価値＞に比べて有意に高かった。

表 3 男女別にみた子どもの価値の各因子得点の平均値

	男性 $M(SD)$ 112 名	女性 $M(SD)$ 149 名
精神的価値	3.49 (0.44)	3.55 (0.42)
伝統的価値	2.32 (0.66)	2.20 (0.58)
制約・負担	2.38 (0.53)	2.59 (0.49)
社会的関係価値	2.70 (0.70)	2.79 (0.60)

3. 個人としての自分への、価値配分と資源配分

自分を「家庭人としての自分」と「個人としての自分」の 2 つに分けた場合、それぞれどれほどの割合で価値と資源（時間、労力）を割り当てられるかという質問への回答について、価値と資源のそれぞれについて、「個人としての自分」に割り当てられた値の平均値を求めた。そして、「個人としての自分」に割り当てられた割合は、価値と資源で違いがみられるのか、また、性別による違いがみられるのかを検討するために、性別と配分要因（価値、資源）の 2 要因分散分析を行った。男女別にみた、価値と資源の「個人としての自分」への配分の平均値と標準偏差を表 4 に示

した。

分散分析の結果、性別の主効果が認められ ($F(1, 259) = 5.21, p < .05$)、また、配分要因の主効果が認められ ($F(1, 259) = 55.54, p < .001$)、性別と配分要因の交互作用も有意であった ($F(1, 259) = 28.38, p < .001$)。そこで、単純主効果の検定を行った結果、資源配分において性別の単純主効果が有意 ($F(1, 518) = 22.15, p < .001$) であり、また、女性において配分要因の単純主効果が有意 ($F(1, 259) = 81.66, p < .001$) であった (図 1)。

表 4 男女別にみた個人としての自分への、価値配分と資源配分の平均値

	価値配分 $M(SD)$	資源配分 $M(SD)$
男性 112 名	4.70(1.74)	4.48(1.30)
女性 149 名	4.85(1.78)	3.56(1.48)

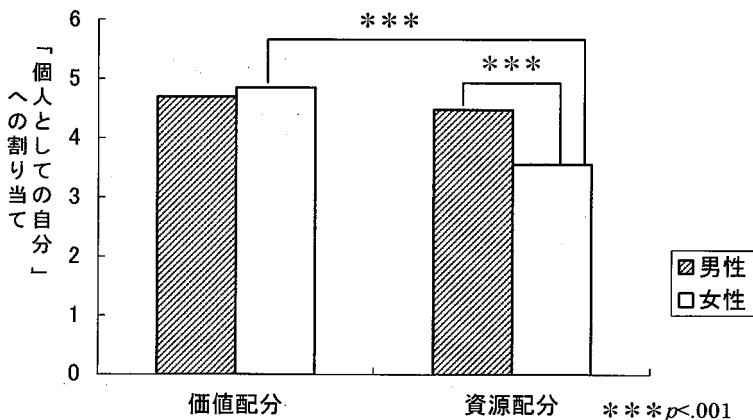


図 1 男女別にみた「個人としての自分」への価値配分と資源配分の平均値の差

4. 大学生における子どもの価値と家族のなかでの個人化志向との関連

本研究では、「家族のなかでの個人化志向」を、家族のなかであっても、個人としての自分に、どれだけ価値をおいて大切にしたいと思うのかという観点から捉えることとした。そこで、家族のなかでの個人化志向の強さを、「個人としての自分」に対する価値の割り当ての大きさとして考え、子どもの価値と個人化志向との関連を検討した。

男女別に、子どもの価値各因子得点と「個人としての自分」への価値配分の値（以下、個人価値配分とする）との相関係数を算出した（表 5）。

表5 男女別にみた子どもの価値各因子得点と個人価値配分との相関係数

	精神的価値	伝統的価値	制約・負担	社会的関係価値
男性(112名) 個人価値配分	-0.26**	-0.24*	0.24*	-0.08
女性(149名) 個人価値配分	-0.29**	-0.14	0.08	-0.24**

* $p < .05$ ** $p < .01$

男性では、個人価値配分は、＜精神的価値＞、＜伝統的価値＞との間に有意な負の相関が、＜制約・負担＞との間に有意な正の相関が認められた。女性では、個人価値配分は、＜精神的価値＞、＜社会的関係価値＞との間に有意な負の相関が認められた。

5. 大学生における子どもの価値と将来のライフスタイルとの関連

まず、将来のライフスタイルに関する質問への回答について、選択されたライフスタイルの度数と割合を表にまとめた(表6)。

男性が将来のパートナーに期待するライフスタイル(以下、男性期待ライフスタイル)と、女性が理想とするライフスタイル(以下、女性理想ライフスタイル)においては、「両立」の回答が最も多かった。女性が実際になりそうだと思う予定のライフスタイル(以下、女性予定ライフスタイル)では、「再就職」の回答が最も多かった。

表6 将来のライフスタイルに関する質問への回答 数字は人数(割合)

	非婚就業	DINKS	両立	再就職	専業主婦	計
男性期待	7 (6%)	2 (2%)	68 (61%)	28 (25%)	7 (6%)	112 (100%)
女性理想	2 (1%)	5 (3%)	76 (51%)	52 (35%)	14 (9%)	149 (100%)
女性予定	7 (5%)	2 (1%)	58 (39%)	60 (40%)	22 (15%)	149 (100%)

男性期待ライフスタイルと女性理想ライフスタイルについて、また、男性期待ライフスタイルと女性予定ライフスタイルについて、選択されたライフスタイルの比率に差異があるのかを調べるため、 χ^2 検定を行った。この際、5未満の期待値が全体の20%以上となり、 χ^2 検定には適さないため、期待値の少ない「非婚就業」と「DINKS」について、「子どもを持たないライフスタイル」という観点から二つを合併し、「子どもなし」として検定を行った。その結果、男性期待ライフスタイルと女性理想ライフスタイルでは、回答されたライフスタイルの比率に有意な差は認められなかった。男性期待ライフスタイルと女性予定ライフスタイルでは、回答されたライフスタイルの比率に有意な差が認められた($\chi^2(3)=15.25, p < .01$)。そこで、残差分析を行った結果、残差の一覧表にみられるように、男性期待ライフスタイルでは、「両立」の回答が多く、「再就職」と「専業主婦」の回答が少なかった。女性予定では、「両立」の回答が少なく、「再就職」と「専業主婦」の回答が多かった(表7)。

表7 男性期待ライフスタイルと女性予定ライフスタイルにおける調整された残差

	子どもなし	両立	再就職	専業主婦
男性期待	0.63	3.50**	-2.57**	-2.17*
女性予定	-0.63	-3.51**	2.60**	2.16*

* $p < .05$ ** $p < .01$

次に、子どもの価値と将来のライフスタイルとの関連について検討した。ここでも、サンプル数の少ない「非婚就業」と「DINKS」について、「子どもを持たないライフスタイル」という観点から二つを合併し、「子どもなし」として分析を行った。

まず、男性期待ライフスタイル、女性理想ライフスタイル、女性予定ライフスタイルのそれぞれにおいて、選択されたライフスタイルごとに、子どもの価値の各因子得点の平均値を求め、それぞれの平均値と標準偏差を表8に示した。

表8 選択されたライフスタイルごとの子どもの価値各因子得点の平均値

	子どもなし <i>M(SD)</i> 9名	両立 <i>M(SD)</i> 68名	再就職 <i>M(SD)</i> 28名	専業主婦 <i>M(SD)</i> 7名	
男性 期待 112名	精神的価値	2.78(0.50)	3.56(0.35)	3.47(0.43)	
	伝統的価値	1.74(0.68)	2.30(0.58)	2.39(0.69)	
	制約・負担	2.63(0.55)	2.38(0.54)	2.40(0.43)	
	社会的関係価値	2.48(0.76)	2.74(0.70)	2.61(0.72)	
女性 理想 149名	子どもなし <i>M(SD)</i> 7名	両立 <i>M(SD)</i> 76名	再就職 <i>M(SD)</i> 52名	専業主婦 <i>M(SD)</i> 14名	
	精神的価値	2.66(0.60)	3.56(0.37)	3.64(0.32)	3.59(0.39)
	伝統的価値	1.43(0.39)	2.20(0.53)	2.24(0.57)	2.37(0.65)
	制約・負担	3.21(0.25)	2.54(0.48)	2.53(0.45)	2.73(0.52)
	社会的関係価値	2.14(0.47)	2.84(0.59)	2.77(0.58)	2.90(0.58)
女性 予定 149名	子どもなし <i>M(SD)</i> 9名	両立 <i>M(SD)</i> 58名	再就職 <i>M(SD)</i> 60名	専業主婦 <i>M(SD)</i> 22名	
	精神的価値	3.26(0.79)	3.53(0.40)	3.66(0.32)	3.42(0.39)
	伝統的価値	1.94(0.53)	2.11(0.52)	2.37(0.62)	2.05(0.50)
	制約・負担	2.59(0.40)	2.54(0.51)	2.58(0.47)	2.74(0.48)
	社会的関係価値	2.22(0.67)	2.73(0.56)	2.94(0.55)	2.74(0.64)

男性期待ライフスタイルにおいて、選択されたライフスタイルと子どもの価値との関連を検討するため、ライフスタイルと子どもの価値の2要因分散分析を行った。その結果、子どもの価値要因の主効果が認められ ($F(3, 324) = 52.38, p < .001$)、また、ライフスタイルの主効果が認められ ($F(3, 108) = 3.92, p < .05$)、ライフスタイルと子どもの価値の交互作用も有意であった ($F(9, 324) = 6.17, p < .001$)。そこで、単純主効果の検定を行った結果、<精神的価値> ($F(3, 432) = 7.69, p < .001$) <伝統的価値> ($F(3, 324) = 8.91, p < .001$) において、ライフスタイルの単純主効果が有意であった。また、すべてのライフスタイルにおいて、子どもの価値要因の単純主効果が有意で

あった(子どもなし ($F(3, 324) = 11.11, p < .001$), 両立 ($F(3, 324) = 17.18, p < .001$), 再就職 ($F(3, 324) = 13.72, p < .001$), 専業主婦 ($F(3, 324) = 28.88, p < .001$)) .

次に, 女性理想ライフスタイルにおいて, 選択されたライフスタイルと子どもの価値との関連を検討するため, ライフスタイルと子どもの価値の2要因分散分析を行った. その結果, 子どもの価値要因の主効果が認められ ($F(3, 435) = 92.76, p < .001$), また, ライフスタイルの主効果が認められ ($F(3, 145) = 8.59, p < .001$), ライフスタイルと子どもの価値の交互作用も有意であった ($F(9, 435) = 10.94, p < .001$). そこで, 単純主効果の検定を行った結果, 全ての子どもの価値因子において, ライフスタイルの単純主効果が有意であった(精神的価値 ($F(3, 580) = 13.97, p < .001$), 伝統的価値 ($F(3, 580) = 11.52, p < .001$), 制約・負担 ($F(3, 580) = 6.51, p < .001$), 社会的関係価値 ($F(3, 580) = 7.83, p < .001$)). また, すべてのライフスタイルにおいて, 子どもの価値要因の単純主効果が有意であった(子どもなし ($F(3, 435) = 47.14, p < .001$), 両立 ($F(3, 435) = 27.17, p < .001$), 再就職 ($F(3, 435) = 29.80, p < .001$), 専業主婦 ($F(3, 435) = 21.47, p < .001$)) .

女性予定ライフスタイルにおいて, 選択されたライフスタイルと子どもの価値との関連を検討するため, ライフスタイルと子どもの価値の2要因分散分析を行った. その結果, 子どもの価値要因の主効果が認められ ($F(3, 435) = 121.52, p < .001$), また, ライフスタイルの主効果が認められ ($F(3, 145) = 4.89, p < .005$), ライフスタイルと子どもの価値の交互作用も有意であった ($F(9, 435) = 2.11, p < .05$). そこで, 単純主効果の検定を行った結果, <社会的関係価値>において, ライフスタイルの単純主効果が有意 ($F(3, 580) = 7.44, p < .001$) であった. また, すべてのライフスタイルにおいて, 子どもの価値要因の単純主効果が有意であった(子ども無し ($F(3, 435) = 31.68, p < .001$), 両立 ($F(3, 435) = 34.40, p < .001$), 再就職 ($F(3, 435) = 31.14, p < .001$), 専業主婦 ($F(3, 435) = 30.63, p < .001$)) .

以上の分析において, 単純主効果が有意であったものについて, Ryan 法による多重比較を行い, その結果を表9にまとめて示した.

考察 本研究の目的は, 大学生における子どもの価値について, 性別や家族のなかでの個人化志向, 将来のライフスタイルなどとの関連を中心に検討することであった.

1. 大学生における子どもの価値の内容と構造についての検討

本研究では, まず, 大学生における子どもの価値の内容と構造を検討した. その結果, 大学生が評価する子どもの価値は, <精神的価値>, <伝統的価値>, <社会的関係価値>といった肯定的な価値と, 否定的な価値である<制約・負担>から構成されていることが明らかになった. 本研究の<精神的価値>, <伝統的価値>, <制約・負担>は, それぞれが, 前原(2002)の<情緒的価値>, <必然的価値>, <子育て代償>に対応する内容だった. また, 前原(2002)で示された, 「子どもを持つことは自分に何らかの利得をもたらす」という<道具的価値>のうち, 社会的な関係における利得についての項目のみが因子を構成して<社会的関係価値>となった. また, 柏木・永久

表9 各ライフスタイル間および子どもの価値各因子間の有意差の有無

男性期待	<精神的価値>における多重比較	両立=再就=専主>なし
	<伝統的価値>における多重比較	専主>両立>なし, 再就>なし,
	「子どもなし」における多重比較	精神=制負=社会>伝統,
	「両立」における多重比較	精神>社会>伝統=制負
	「再就職」における多重比較	精神>社会=制負=伝統
女性理想	「専業主婦」における多重比較	精神>社会=伝統>制負
	<精神的価値>における多重比較	両立=再就=専主>なし
	<伝統的価値>における多重比較	両立=再就=専主>なし
	<制約・負担>における多重比較	なし>両立, なし>再就職
	<社会的関係価値>における多重比較	両立=再就=専主>なし
女性予定	「子どもなし」における多重比較	制負>精神=社会>伝統
	「両立」における多重比較	精神>社会>制負>伝統
	「再就職」における多重比較	精神>社会>制負>伝統
	「専業主婦」における多重比較	精神>社会>伝統, 精神>制負
	<社会的関係価値>における多重比較	両立=再就=専主>なし
女性予定	「子どもなし」における多重比較	精神>制負>伝統, 精神>社会
	「両立」における多重比較	精神>社会=制負>伝統
	「再就職」における多重比較	精神>社会>制負>伝統
	「専業主婦」における多重比較	精神>社会=制負>伝統
	<社会的関係価値>における多重比較	両立=再就=専主>なし

注1) >は有意差あり, =は有意差なしを表す(いずれも有意水準5%)

注2) 子どもなし⇒なし, 再就職⇒再就, 専業主婦⇒専主, 精神的価値⇒精神, 伝統的価値⇒伝統, 制約・負担⇒制負, 社会的関係価値⇒社会

(1999)が母親を対象として子どもの価値について分析し抽出した因子のうち、<情緒的価値>と<自分のための価値>がほぼ結合して本研究では<精神的価値>となった。また、「子どもを持つのは当然であり、家の継承のために必要」という内容を示し、年長世代の母親が強く認めている<社会的価値>は、本研究の<伝統的価値>に対応するものであると考えられる。大野ら(1996)は、父親と母親を対象に子どもの価値について分析し、6つの因子を抽出した。そのうち、<負担・制約>は本研究の<制約・負担>に対応し、<支え・生きがい>と<充実・楽しみ>が結合して本研究の<精神的価値>となり、<社会的存在>と<当然・自然>が結合して本研究の<伝統的価値>となっている。大野ら(1996)で抽出された「子どもは自分の分身である」といった<分身>については、本研究では「子どもは自分の分身である」といった内容を説明する項目が少なかったため、因子として抽出されなかったと考えられる。

2. 大学生における子どもの価値と性別との関連についての検討

次に、大学生における子どもの価値と性別との関連について検討した。その結果、男女ともに、子どもの価値として、＜精神的価値＞を他の3つの価値よりも有意に高く評価しており、性別に関わらず、現代の大学生は、子どもの存在が親にとって精神的な支えになると高く評価していることが示唆された。一方で、女性は男性に比べて＜制約・負担＞が有意に高く、女性は男性よりも、将来子どもを持った場合、子どもによって自分の人生が制約され、自分にとって負担となると感じていることが分かった。また、将来家庭を持ったときに、「個人としての自分」に置きたい価値の割合、実際に資源（時間・労力）を与えられる割合と、性別との関連を検討したところ、男性は価値と資源とで差は認められなかったが、女性は価値よりも資源の方が「個人としての自分」への割り当てが有意に少なかった。また、資源の「個人としての自分」への割り当ては、女性のほうが男性よりも有意に少なかった。これらのことから、現代の女子大学生は、将来家庭を持ち母親となったときには、子育てなどに時間や労力をとられ、個人としての自分の生活を犠牲にしなければならないことが予想されるため、子どもによって自分の生活が制約され、自分の負担になると考える傾向が男性よりも強いのではないかと考えられる。この子どもの価値と性別との関連について、実際に子育てを経験している世代についての研究との比較をした。大野ら（1996）の父親と母親を対象に行った研究では、母親は父親よりも＜負担・制約＞と＜充実・楽しみ＞が高く、逆に父親は母親よりも＜社会的存在＞と＜当然・自然＞が高いという結果となり、性別による子どもの価値の違いが示された。本研究において、＜制約・負担＞は女性のほうが男性よりも高いという結果になったことから、「子どもは自分の負担となる存在である」とする、子どもに対する否定的な評価は、実際に親となる前の段階から男女差があることが示唆された。

3. 大学生における子どもの価値と家族のなかでの個人化志向との関連についての検討

つづいて、大学生における子どもの価値と家族のなかでの個人化志向との関連について検討した。その結果、男女ともに、「個人としての自分」への価値配分の値と＜精神的価値＞得点の高さとの間に有意な負の相関が認められたことから、個人化志向の強さは、子どもによる精神的な充足を期待しない傾向と結びついていることが考えられる。逆に考えれば、個人化志向が弱く、「個人としての自分」よりも「家庭人としての自分」を大切にしたいと考えている人は、子どもによる精神的な充足を強く期待し、父親・母親としての幸せや充実感が、自分にとって重要であると強く感じているのではないかと考えられる。柏木・永久（1999）の母親を対象とした研究においても、同様に、個人化傾向の強い母親は子どもの精神的価値の評価が低いことが報告されている。本研究の結果から、実際に子どもを持った世代だけでなく、子どもを持つ前の世代においても、家族のなかでの個人化志向と子どもの精神的な価値との間に関連があることが明らかになった。また、男性では、「個人としての自分」への価値配分の値と＜伝統的価値＞得点との間に有意な負の相関が認められ、＜制約・負担＞得点との間に有意な正の相関が認められた。女性では、「個人としての自分」への価値配分の値と＜社会的関係価値＞得点との間に、有意な負の相関が認められた。男性は、個人化志向が強いほど、子どもの精神的価値を低く評価し、子どもを持つことは当然だと考える傾向が弱く、子ども

を持つことによる制約や負担を強く感じているということがわかった。一方で、女性は、個人化志向が強いほど、子どもの精神的価値を低く評価し、子どもを持つことは社会との関係につながることだと考える傾向が弱いことがわかった。男性では、個人化志向の強さと、否定的な価値である<制約・負担>を高く評価する傾向との間に関連がみられたが、女性では、個人化志向の強さと、<制約・負担>の評価との間に関連は認められなかった。本研究において、男性よりも女性の方が、<制約・負担>が高いという結果が得られたことから、女性において、個人化志向の強さと<制約・負担>に関連が認められなかったのは、個人化志向の強さに関わらず、女性は<制約・負担>を強く感じているからではないかと考えられる。このことから、女性は、たとえ家庭人としての自分を重視し、育児や子どもを肯定的に評価していても、子育てによる制約や負担を感じ、アンヴィバレントな心理状況であることが示唆された。ただし、本研究において、有意な相関が認められたものは、相関係数がいずれも0.3以下と弱い相関であったことから、個人化志向と子どもの価値について今回得られた考察は、いずれも結論を避けねばならず、再検討の必要があると考えられる。

4. 大学生おける子どもの価値と将来のライフスタイルとの関連についての検討

つづいて、子どもの価値と選択されたライフスタイルとの関連について考察する。まず、本研究において、将来のライフスタイルとして、どのようなライフスタイルが選択されたのかということについて考察する。男性期待ライフスタイルと、女性理想ライフスタイルにおいては、「両立」の回答が最も多かった。女性予定ライフスタイルでは、「再就職」の回答が最も多かった。国立社会保障・人口問題研究所(1999)が1997年に行った調査では、男性期待ライフスタイルは、「再就職」が43.4%と最も多く、「両立」は17.0%であった。この調査では、過去の調査と比較して、10年間(1987-1997)で、「両立」をパートナーに期待する男性が増えてきているとしている。本研究の結果では、60.7%とさらに増加していることから、「両立」を期待する男性が増加する傾向が続いているのではないかと考えられる。ただし、本研究において、「両立」を期待する割合が5割をこえる結果となったのは、調査対象者全員が教育学部の学生であり、教員などの専門職を目指す女性が身近にいるという環境による影響が考えられる。また、男性期待ライフスタイルと女性理想ライフスタイルについて、および、男性期待ライフスタイルと女性予定ライフスタイルについて、選択されたライフスタイルの比率に差異があるのかを検定した。その結果、女性が理想とするライフスタイルは、男性が女性に期待するライフスタイルとの間に差が見られず、ともに「両立」を選択する人が多いが、女性は実際には仕事か家庭かの選択をしなければならぬと感じており、「両立」を選択する女性が減り、「再就職」や「専業主婦」を選ぶ女性が増えて、男性が期待するライフスタイルと女性が予定するライフスタイルに差がでてくることが示唆された。

続いて、子どもの価値と選択されたライフスタイルとの関連について考察する。男性期待ライフスタイルでは、「子どもなし」は、その他のライフスタイルに比べて<精神的価値>、<伝統的価値>が低かった。また、女性理想ライフスタイルでは、「子どもなし」が、その他の全てのライフスタイルに比べて、<精神的価値>、<伝統的価値>、<社会的関係価値>が低く、「両立」「再就職」に比べて<制約・負担>が高かった。このことから、男性も女性も、子どもを持たないライフスタ

イルを望む人は、子どもの価値を全体的に低く評価する傾向があることが示唆された。また、女性理想ライフスタイルでは、全ての子どもの価値について、ライフスタイルの違いによる各因子得点の差が認められたのに対し、女性予定ライフスタイルでは、＜社会的関係価値＞においてのみライフスタイルの違いによる因子得点の差が認められた。これは、女性が実際になりそうな予定のライフスタイルとして、自分が本来望む理想のライフスタイルとは異なるライフスタイルを選ぶ人がいたために、女性理想ライフスタイルにおいてそれぞれのライフスタイルを選んだ人が持っていた子どもの価値の特徴が、女性予定ライフスタイルではみられなくなったのではないかと考えられる。また、各ライフスタイルにおける、子どもの価値各因子得点の多重比較の結果から、女性理想ライフスタイルにおいて、「子どもなし」を選択した群のみが、＜制約・負担＞を＜精神的価値＞に比べて高く評価していた。男性期待ライフスタイルにおいても、女性予定ライフスタイルにおいても、＜制約・負担＞を＜精神的価値＞よりも高く評価しているライフスタイル群が無いことから、子どもによって自分の人生が制約され、子どもは自分の負担になると強く感じていることが、理想とするライフスタイルとして子どもを持たないライフスタイルを望む女性の特徴といえると考えられる。ただし、この子どもの価値とライフスタイルとの関連についての分析では、各ライフスタイルを選択した人数が大きく異なるため、対象者の数を増やし、再検討する必要があると考えられる。

以上のことから、本研究によって、大学生における子どもの価値と、性別、家族のなかでの個人化志向、将来のライフスタイルなどとの関連が明らかになった。今後、結婚や子育てがより現実的になる20代後半から30代前半の未婚層や、大学生の親にあたる世代など、他の世代における子どもの価値との比較を深めることによって、現代の大学生が持つ子どもの価値の特徴を、より明らかにすることがのぞまれる。

引用文献

- 平山順子 (1999). 育児期における専業主婦の個人化欲求—経済的資源へのアクセス志向性との関連を中心に— 発達研究, 14, 62-77.
- 柏木恵子 (1998). 社会変動と家族発達 柏木恵子 (編) 結婚・家族の心理学—家族の発達・個人の発達— ミネルヴァ書房 pp.5-50.
- 柏木恵子 (2001). 子どもという価値—少子化時代の女性の心理— 中公新書
- 柏木恵子・永久ひさ子 (1999). 女性における子どもの価値—今, なぜ子を産むか— 教育心理学研究, 47, 170-179.
- 国立社会保障・人口問題研究所 (1999). 独身青年層の結婚観と子ども観 第11回出生動向基本調査, 2, 11-96.
- 前原武子 (2002). 大学生における子どもの価値, 将来のライフスタイルと家族評価 琉球大学教育学部紀要, No.61, 193-199.
- 目黒依子 (1987). 個人化する家族 勁草書房
- 永久ひさ子・柏木恵子 (2001). 中年期の母親における「個人としての生き方」への態度 発達研究, 16, 69-85.
- 大野祥子・柏木恵子・若松素子・岡松佐知子 (1996). 親にとっての子どもの価値と育児参加 牧野カツコ・中野由美子・柏木恵子 (編) 子どもの発達と父親の役割 ミネルヴァ書房 pp.107-120.